沖縄に鬱積する"マスコミの寵児"への不満

大田昌秀 ある反戦政治家の正体

熱に浮かされたような讃辞に増幅された虚像がもうひとつの「沖縄の心」を見失わせている……

真神博（ノンフィクション作家）＆本誌取材班

嘉手納基地

普天間基地

大田昌秀沖縄県知事の人気が、ますます高まっている。ここしばらく革新勢力に良い話題がなく、その中核を担っていると自負していた社会党がもはや崩壊寸前に追い込まれるなど、かつてこの勢力にシンパシーを抱いていた人々にはフラストレーションがたまる一方だった今日このごろ、まさに天恵のようにカタルシスをもたらしてくれる人物、それが大田知事だった。

単なる国からの機関委任事務、それを断ったからといって罰則規定もない形式的な業務である代理署名を拒否し、丸い特徴的な目玉をむいて見得を切って見せただけで、強い国対弱い沖縄県という判官びいきを惹きつける構図を描くことをまんまと成功させてしまった、端倪すべからざる才能の持ち主といえなくもない。かつてアメリカ留学で身につけた英語を流暢に操り、ダブルのスーツを格好よく着こなし、沖縄の悲劇を学者らしい落ち着いた口調で繰り返すこの知事を、全国的な人気者に引き上げたのは紛れもなく中央のマスコミだった。

昨年九月に起こった米兵による少女暴行事件によって盛り上がった反基地感情に乗り、ごく一部の反戦地主の反乱を過剰に報道し、より過激な行動がいかにも平均的な住民感情であるかのような錯覚を誘って報じた中で、偶像が造り上げられていった。

当の沖縄県に行ってあれこれ聞いてみると中央のマスコミが伝えることとは、まったく違う声の多さに驚かされる。それは肝心の基地の有り様から、大田知事の人格にいたるまで、沖縄県が抱えている問題すべてにわたっていた。問題にされている内容は複雑で、かつ奥深い。とても中央のマスコミがいうように反基地という点に集約していえるようなものではないのである。

議会でのニセ答弁事件

大田知事の軌跡を調べていると、この人には虚言癖があるのではないかと思わず疑ってしまうような事実に、たびたび出くわす。その最たるものは、議会で飛び出したニセ答弁である。

大田は沖縄県知事としてたびたび訪米している。戦後五十年の節目を翌年に控える平成六年六月にも訪米した。この時の訪米では、出発に先だって、大田の後援団体である『県民の会』が五千円の会費を取って、千人以上を集めて盛大な歓送会を催した。訪米の目的は、アメリカ下院のデラムス軍事委員長などと会見し、基地沖縄の実態を訴えることだった。また、沖縄返還に関する秘密文書の存在の有無を、直接キッシンジャー元国務長官に確かめるという目的もあると説明されていた。

帰国後に開かれた県議会で、自民党の仲松昌彦議員の質問に答えて、大田は訪米の成果を次のように述べた。

キッシンジャー元国務長官とは、先方の都合で会えなかったと前置きし、

「デラムス下院軍事委員長との会見には、アバークロンスビー下院軍事委員も同席の上、県からはとくに来年が太平洋戦争・沖縄戦終結五十周年の節目に当たる重要な年であることから、沖縄の米軍基地問題の解決を強く要請する旨伝えました。

これに対しデラムス委員長は、下院軍事委員会として沖縄の基地問題の解決を図るために国防総省に対し、一定期限を付して調査するよう勧告する条項を、下院で可決した。この法案が最終的に成立するよう上院との調整に努力する旨の、説明がありました。デラムス委員長の発言は、大変心強く思われるものであり、沖縄の基地問題に対する米国内の関係者の理解も一段と深まっている感じが強くいたしました」